【論文】

旧約・新約聖書のはじめに登場する幼子物語における神の倫理的態度と来日最初期のショファイユの幼きイエズス修道会の霊性

In the Childhood Story that Appears at the Beginning of the Old and New Testaments God's Ethical Attitude and the Earliest Visit to Japan the Spirituality of the Young Jesus Monastic Order

星野　正道

旧約聖書の冒頭には創世記が置かれており、神話物語が終わるとアブラハムによる歴史物語が始まる。高齢になっても子供に恵まれないアブラハムとサラの夫婦が女奴隷ハガルによってイシュマエルをもうける話で開始される。また新約聖書ではイエスの誕生物語はルカ福音書、マタイ福音書の冒頭に置かれ、天使ガブリエルからおとめマリアへのお告げが発端となる。両方とも人間社会の一般通念から考えると特異な形での誕生であり、それを引き受ける女性もまた誕生してくる幼子も社会的承認を拒絶される危機にさらされることになる。本論文は旧約・新約両聖書がこのような特異な誕生物語を冒頭に置くことで人間社会にいかなる霊性をもたらそうとしているのか考察し、その霊性に生かされたショファイユの幼きイエズス修道会の活動が聖書の霊性の根本に根ざすものであることを述べるものである。

キーワード：倫理、教育、聖書、霊性、カトリック

1　アブラハムの場合

1.1　歴史を通してアブラハムに託されたもの

アブラハムは神によって改名される以前、アブラムと呼ばれていた。主はアブラムとの最初の出会いにおいて、次のように語りかけている。

創世記 12 の 1～
主はアブラムに言われた。
「あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福しあなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」

ここで何回も祝福という言葉が出てくるが、旧聖書において神の祝福とはまず第一に家族や財産の増加、そのための子孫の誕生によってもたらされると考えられていた（秋山 2003　pp.218）。アブラムは主の言葉に従って旅立ったが、この時すでに 75 歳であった（v.4）。また妻のサライもすでに老齢に達していて、子をもうける可能性はありえないと考えるのが常識であった。しかし人間の常識では、神の言葉の方が非常識と思われて当然であったが、アブラムとサライは主の言葉に従って旅立った（v.4）。アブラムは神の約束の地カナン地方に到達したが、その地方にはすでにカナン人が住んでおり、人間の常識ではここを主が示す

地として定住することは非常に難しい状況であった。それでも聖書は次のように告げる。

創世記 12 の 7
主はアブラムに現れて、言われた。
「あなたの子孫にこの土地を与える。」

ここでも子孫の誕生と財産の獲得、すなわちこの場合は神による土地の譲与によって神の祝福がもたらされることが述べられている。しかもアブラムは自分に現れた主のために、そこに祭壇を築いた（v.7)。そのことによって彼は全面的に主の言葉に信頼し聞き従うことを主に対して表明した。その後、アブラムはその地方に飢饉があったためエジプトに逃れ滞在し、再び最初に祭壇を築き主の名を呼んだ場所に戻ってきた（13 章の 4)。しかし主が子孫を約束したにもかかわらず、いまだに子を授かることはなかった。そのアブラムに対して主は次のように語る。

創世記 13 の 14〜17
主はアブラムに言われた。
「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数え切れないであろう。さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与える。」

この主の言葉を聞くと、アブラムはマレムの木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築き（v.18)、主の言葉への絶対的信頼を表明する。この主の言葉の実現を、肉の目でとらえることなしになされた主の言葉それ自体への絶対的信頼の態度ゆえに、アブラムは血統によるヘブライ人の先祖としてではなく、信仰者の先祖、始祖として聖書においてとらえられている。

信仰についてヘブライ人の手紙 11 章 1 節で次のように定義している。

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

すでに目に見えていて、人間理性で確認できる事柄については信じるという内的動きは発動しない。しかし、神の言葉をはじめ、人間理性が愛と正義を確信していることについては、それがどのような形で実現するかは不明であったとしても、今は見ることのできない現実を確信していることを自分自身、確認することは可能である。この人間の人間でなければ不可能なありようを、ここで信仰と呼んでいる。

聖書は様々な時代に成立した多様な文書において、特にアブラハムにおいてこのことに言及している。
ヘブライ人への手紙 11 の 8〜9 は次のように言っている。

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出かけてくように召し出されると、これに服従し、行く先も知らずに出発したのです。信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。

またパウロも次のように言っている。

ガラテヤの信徒への手紙 3 の 7〜9
だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子孫であるとわきまえなさい。聖書には、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。

新約の使徒であるパウロにこの確信を与えた旧約聖書は次のように語る。

創世記 15 の 5〜6
主は（まだ子どもに恵まれていないアブラムを）外に連れ出して言われた。
「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」
そして言われた。
「あなたの子孫はこのようになる。」
アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

パウロは次のように語っている。

ローマの信徒への手紙 4 の 3
聖書には何と書いてありますか。
「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」
とあります。

ローマの信徒への手紙 4 の 13
神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。

このように聖書全体を見渡してみると、神はアブラハムが主の約束の実現を自分の目で見える形で体験できたから、それを救いの根拠にするのではなく、アブラハムが主の言葉自体への絶対的信頼を生きたことを彼の救いとして提示している。このことによって、血統によってアブラハムの子孫に属することが救いの条件ではないという宣言が聖書の出発点、創世記と聖書全体によって主張され、維持されていくことになる。主の言葉、すなわち自分を創造した神の自分への計画があることを人が信じることによって、あらゆる文化や民族に属する人々は、その歴史的相違を超えてアブラハムに連なる者となる。これが聖書の伝えようとする一貫したテーマである。

1.2　アブラハムにおけるおさな子

このように信仰の祖と言われるアブラハムであるが、すでに老齢となっているのに、祝福の基である我が子を授かることができなかった。しかも、神はアブラハムから多くの子孫が生まれることを約束した。この矛盾の中を彼は人間としてどうのように生きたのであろうか。

創世記 15 の 1～4
主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。
「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常におおきいであろう。」
アブラムは尋ねた。
「わが神よわたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」
主の言葉があった。
「その者があなたの後を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

アブラムから尋ねたからではなく、主のイニシアティブによって 70 歳を超えた老夫婦、アブラムとサラに子供が誕生することが告げられている。アブラムは子供についてはすでにあきらめていて、ダマスコのエリエゼルに跡を継がせる計画を告げる。しかし、主はあくまでも「あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」と主張する。ここでもアブラムは主の言葉を信じることになる。アブラムから生まれる者が跡を継ぐことが主の望みであるならば、ということで、妻のサライは夫アブラムに次のことを提案する。

創世記 16 の 2~
「主はわたしに子供を授けてくださいませんでした。どうぞ、わたしの女奴隷のところに入ってください。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません。」
アブラムは、サライの願いを聞き入れた。アブラムの妻サライは、エジプト人の女奴隷ハガルを連れてきて、夫アブラムの側女とした。

こうしてアブラムは妻サラの提案により側女をとり、その女奴隷ハガルによって子供を得ることになった。家父長制の下、家を存続させるためにこのような方法がとられていた。この物語の特異性はアブラムが側女を臨むのではなく、妻が側女を望んだという点であろう。アブラムは家長であるわけで、子供の出産は切に望んでいたのだが、自分も妻もすでに 70 歳を超えていて、その可能性はありえないことはわかっていた。だから自分の子供ではないが、ダマスコのエリエゼルに家督を譲ることを決めていた。しかし、主はあくまでもアブラムから子供が生まれて跡継ぎになると言ってゆずらない。そこで妻サラが女奴隷ハガルにアブラムの子を産ませる計画を提案した。この時のサラの心の中はいかようであったであろうか。主は絶対にアブラムの子の誕生を望んでおり、その可能性を主張しているのである。この現実の中で老女サラは、自分以外の女性ならばアブラムの子を産める可能性があることに賭けてみよう

としたのである。ここに、サラという女性の主の言葉への忠実さをみることが大切であろう。しかし、そのこと共に、現代とは違う家父長制、家督相続制度のもとにあったとは言え、サラの決断は大変勇気のいるチャレンジであった。60 年以上にわたって夫婦として忠実に過ごしてきたのに、夫の子をもうけるために正妻の側から側女を提案し、夫にすすめなければならないことに、どれほどの悲しみと虚脱感があったかを想像しなければ、この物語はその真意を伝えることには決してならないであろう。そこには自ら子をもうけることのできなかったことへの責めも当然あった。一人のおさな子の誕生にあたって、こうした一人の女性の深い悲しみがあったこと、そして彼女がこの事態を進展させるためにぎりぎりのところで潔さをふるいたたせたこと、それは時代を越えて語り継がれるべき内容であろう。しかし実はこのようなことは歴史の裏側でいつの世にもたくさんあったことである。ただ聖書の新しさと超越性は、こうしたあまたある人間的出来事への別な道を通っての新しい事態の創造にある。

1.3　新たな事態

こうした経過を経て、エジプト人の女奴隷ハガルはアブラムの側女となり彼女は身ごもった（創世記 16 の 3 以下参照)。しかし彼女は自分が主人アブラムの子を宿したことで、女主人サラを軽んじるようになった。その訴えを聞いたアブラムは「女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい。」(v.6）と言ったので、サラは彼女につらく当たり、ハガルはサラのもとから逃げ出した。

ここで一つ押さえておかなければならないことは、ハガルがサラとの間で問題を起こしていることである。ハガルは自分が女主人の夫アブラムと関係を持ち、彼の子を宿したことで女主人サラより優位にあると考え、サラをぞんざいに扱うようになった。子供を宿したことで長年子を望んでもかなえられなかったサラを見下すようになった。サラにしてみれば自分が考え、提案してアブラムの側女にしたので子をもうけることができたのに、その自分に対して対抗意識を持つなどということは正義に反している、としか考えられないことであった。そこで夫アブラムに相談すると、彼は女奴隷ハガルのことは女主人であるあなたの「好きなようにするがよい」(v.6）と答えた。そこでサラは彼女につらく当たり、ハガルは辛さのあまり家を出て行くことになった。アブラムとしてもサラが妻でありすでに 50 年以上苦楽を共にしてきた伴侶であるわけで、ハガルが身ごもることになったのも、サラのいさぎよさによってのことである。そのサラに女奴隷が思い上がって嫌がらせをすると言うことなど考えられないことであり、それが正義とは到底考えられないことであった。アブラムの決定は人間社会での正義でもあり、常識的判断でもあった。そのように見てくるとこうした人間的トラブルはいつの時代にもあり、現代でもあらゆる組織でその解決のためアブラムの立場に立った裁定が繰り返されている。しかしこの時、このアブラムとサラの決定に対して神からの介入があり、神の正義が示される。

1.4　神の計画と人の思い

神の計画はアブラムがサラに「あなたの女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい。」(v.6)と言った思いとはちがっていた。つらく当たるサラのもとを逃げ出したハガルに、主の御使いが荒れ野の泉のほとりで出会うことになる。主の御使いは神の正義を告げる。

「女主人の下に帰り、従順に仕えなさい。わたしはあなたの子孫を数えきれないほど多く増やす。今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。その子をイシュマエルと名付けなさい、主があなたの悩みをお聞きになられたから。彼は野生のろばのような人になる。彼があらゆる人に拳を振りかざすので人々は皆、彼にこぶしを振るう。彼は兄弟すべてに敵対して暮らす」(v.9~12)。

こうしてハガルはアブラムとの間に男の子を産み、その子はアブラムによってイシュマエルと名付けられた。この時、アブラムは 86 歳であった。アブラムは 86 歳でやっと子をもうけることができた。しかしそれは妻サラの産んだ子ではなく、エジプト人女奴隷ハガルによって与えられた子であった。

神の計画はハガルがエジプト人女奴隷であるからとか、与えられた子が非嫡出子であるから、と言った理由でそのいのちと人生が軽んじられてよいとはしない。いのちも人

生も徹底的に神からのものである。これが聖書の神の立場である。それが創世記における神話と伝承の物語を経て歴史の時代を描き始めた最初の物語に記されている。アブラハムの召命において、神は「あなたの子孫を大地の砂粒のようにする」(創世記 13 の 16) と語る。アブラハムの家に子を与え祝福をもたらすと言うメッセージである。こうして男系をもって子孫とするこの時代の社会のありようとして、当然のこととして、この子孫とはアブラハムの嫡出子を考えるのが当然の世界である。だからこそアブラハムは老齢になるまで高齢である妻サラとの間に子を望み、その我が子が与えられないことに苦悩していたのである。

しかし、神の計画は違っていた。アブラムの了解のもとサラがつらく当たったので、家にいられなくて家を出たハガルに主の御使いは言った。

「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい。」

ハガルにはハガルの使命があり、ハガルは女主人であるサラを見下すのではなく、この女主人に仕えること、これが正義だと言うことを告げたのである。家の主人の子を宿したからと言って女主人を軽んじたり、不当な目に遭わせたりすることは神の正義にかなってはいないが、たとえ奴隷であってもハガルの生活の場が剥奪されることは、同様に神の正義にかなってはいないことが告げられる。聖書はこうして最初の物語、創世記からすでに人間の思いを越えた真理・神の計画を提示することになる。さらに非嫡出子をもうけることになるハガルに、主の御使いは次のようなおどろくべき言葉を告げる。

「わたしは、あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす」(16 の 10)。

この言葉はアブラハムへの主の言葉と重なる。

「あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数え切れないであろう」(12 の 16)。

こうして聖書の最初の書物、創世記は民族や身分、出自によってではなく、神によって創造され保たれているかけがえのないいのちとして人間を見ていることを強烈に打ち出している。さらに、それだけでなくハガルに対しても主は

「わたしは、あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす」(v.10)

と告げる。こうして主はアブラハムとサラの間に生まれる子孫によって祝福を約束したように、奴隷女の側女ハガルにもその子孫によって祝福を約束する。ここに人のいのちは人間が取り決めた社会的ルールを越えて、神の喜びであり祝福の表現であることが示される。同時に幼子のいのちは人のいのちに対してすら自らの都合や損得で処理しようとするこの世を生きる人間にとって逆らいのしるしともなる。さらに、その幼いいのちの逆らいのしるし性は、いのちの与え主の人のいのちに対する一貫した計画の顕現であることが示されている。

2　幼子イエスに注ぐまなざし

以上、創世記におけるアブラハム物語からハガルとイシュマエルによって示された神の計画を見た後、新約聖書ではそれがどのように引き継がれているかを見てみよう。

2.1　マリアの場合

幼子イエスが誕生してくるにあたって、神の天使ガブリエルはナザレの町に暮らすおとめ・マリアのところに遣わされた（ルカ 1 の 26)。天使はマリアに告げた。

「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」(v.30)。

しかし、このように語りかけられたマリアにとっては一体なにが起こっているのか理解することは不可能であった。男の子を産むことになると言われても、自分は子の出産に至るような関係を男性との間に経験したことがなかった (v.34)。さらにマリアはヨセフという青年と婚約していた

（v.27）。こうしたマリアにとっては、二重の意味でこの出来事は了解不可能なことであった。一つは男女の交わりなしに子を宿すこと。二つ目は婚約者であるヨセフに説明の仕様がないばかりでなく、村落共同体で共に社会生活を送る人々には不貞の罪を犯したとみなされること。特に二つ目のことに関して、婚約者がいながらの不貞の罪はユダヤの律法において厳しく規定されている。まず出エジプト記20の14神の十戒おいて「姦淫してはならない」とされている。また、申命記22の23において「ある男に婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、その二人を町の門に引き出して石で打ち殺さなければならない。」とされている。

さらに申命記22の25では「もしある男が別の男と婚約している娘と野で出会い、これを力ずくで犯し共に寝た場合は、共に寝た男だけを殺さねばならない。」

しかしこの場合、女性は相手の男を明確に、名指しでうったえなければこの律法は適用されないであろう。マリアがヨセフと婚約しているにもかかわらず神の申し出を受け入れることは、ユダヤ共同体でこうしたいのちの危険があると言うことであった。その時マリアは天使の「神にできないことは何一つない」（ルカ1の37）との言葉に動かされ、有名な「Fiat！お言葉どおり、この身になりますように。」と答えた。

2.2　旧約と新約の対称

次に、このおさな子が主人公となる新約と旧約の二つの部分を対称させてみることにしよう。アブラハムの側女ハガルであるが、ハガルはアブラハムの正妻ではないが、正妻のサラおよびその夫アブラハムの公認を得てアブラハムの子を出産することになる。この点においてマリアの場合とは著しく違う。マリアの場合は将来の夫、ヨセフの理解はまったく得られていない状態での出来事である。まさに律法に違反したと見なされて、極刑に処せられても当然のケースである。ハガルのケースはハガルが高慢心から正妻で子をもうけることのできないサラにつらく当たったことで問題が起きてくる。アブラムはそれに対して前述したようにハガルに対して「あなたの女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい。」と応答した。その言葉に従って正妻サライはハガルにつらく当たったので、ハガルは家を逃げ出し荒れ野をさまようことになる。しかし、神はハガルに祝福を送り、胎内の子とともにいのちを保護し彼女は再び女主人のもとで暮らすことになった。そしてこうした神の配慮によってハガルは無事男の子を出産した。彼はイシュマエルと名付けられた。ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ（わたしを顧みられる神）です」と言った。それは、彼女が、「神がわたしを顧みられた後もなお、わたしはここで見続けていたではないか」と言ったからである。そこで、その井戸は、ベエル・ラハイ・ロイと呼ばれるようになった。（創世記 16 の13~14）。こうしてエジプト奴隷女の側女ハガルもその息子イシュマエルが神にとって祝福に満ちた子供であることが示される。この神のもたらした事態は、正妻サライに高慢な態度をとるハガルを家から追い出してもかまわないとするアブラハムのこの世の常識を前提とした、人間としての思いを高く越えていた。そして聖書はその最初の書物、創世記における太祖アブラハムの物語からいのちを愛する主を描こうとする。

マリアの場合はどのように推移したのであろうか。マリアの胎内に宿った子イエスが神の祝福に満ちた子であるとの宣言は、マリアへのお告げの次の場面、マリアのエリザベト訪問に現れる。マリアは天使の告げの中で親類の不妊の女性、エリザベトが男の子を身ごもり、すでに6ヶ月になっていることを知る（ルカ1の36）。そこでマリアは今いちばん自分の助けを必要としているこの女性のところに、産前産後の手助けに行こうと思い立ち、それを実行する（v.39）。マリアがエリザベトに挨拶をすると、エリザベトの胎内の子がおどり、エリザベトが次のように語る。

「あなたは女のうちで祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています（ルカ1の41~42）。」

こうしてマリアの胎内のイエスは当時の社会の人々から、子を持てない女は神に祝福されていないと決めつけられ、祝福に値しないと見なされていた女性から祝福の宣言を受ける。

2.3　この祝福はアブラハムとの連続性がある

マリアはこのエリザベトから神の祝福の宣言を受けた後

マリアの賛歌を歌う（ルカ 1 の 46~56）。マリアは自分の魂が主をあがめ、救い主なる神を喜びたたえる理由を次のように言っている。

「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです（v.48）」。

事実マリアについて、福音者はヨセフとは違いその出自も身分も語っていない。しかし、マリアの神理解はまずあわれみの主である（v.50）。さらに

「主は思い上がるものを打ち散らし、権力のある者をその座から降ろし、身分の低い者を高く上げ、上に渇く人を善い者で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」（v.51~v.53）。

さらにこの貧しい身分の低い、今、世間の基準で判断するなら父親のわからない子供を懐胎している自分に対して、なぜ神が祝福を送るのかをはっきりと歌っている。

「わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫にとこしえに。(v.55)」

太祖アブラハムの子を宿したエジプト人女奴隷ハガルにあわれみを示した神は、イエスの母になろうとするアブラハムの子孫であり、主のはしため、ギリシャ語原文で女奴隷（v.38,v.48）であるマリアにも、同じあわれみの神であることを新約聖書ルカ福音書はマリアの口を通して宣言させたのである。

アブラハムの正妻サライの発案によってその家の跡継ぎを得るためにだけにアブラハムと交わり、非嫡出子を宿したハガルは、サライとの折り合いが悪くなりアブラハムの許しを得て、サライにつらく当たられ家を出た。しかし主は使いを送り、彼女に家に帰るよう命じ、母ハガルとその子のいのちを守る（創世記 16 の 1~16）。一方、マリアはヨセフと婚約中に聖霊によってヨセフの子ではない子を宿した。正しい人であったヨセフは律法に従ってマリアとは別れる決心をする。しかし、主の使いがヨセフに送られることによって、マリアの胎内の子が聖書イザヤ書に預言されているインマヌエルであることを告げられ、イエスの養父になることを決心し、イエスのいのちとマリアのいのちは守られることになった（マタイ 1 の 18~24）。

この二つのおさな子をめぐる話しには一つの共通点がある。それはどちらも社会的に認知された懐胎ではないという点である。ハガルの場合は正妻がいながらの懐胎であり、マリアの場合は婚約者がいながらの懐胎である。両方とも、おそらくいつの時代の人間共同体であっても、公の祝福を受けられないケースと言ってもよいであろう。それにもかかわらず旧新両約聖書はそれぞれのテーマである神の救いの物語を語り始めるにあたって、いかなる文化においても人間社会が受け入れを躊躇するおさな子の物語を、あえてその始めにおいている。その最大の目的は神の超越性の確保であり、この神の超越性ゆえにそのご自身の似姿として創造した万民のいのちが例外なく、いかにかけがえのないものであるかを主張するためである。聖書の登場人物がそうである社会的存在としての人間が、この世を神の意志にそった社会にしようとし、それぞれ社会倫理を形成しようとしている。しかしその為そうとするところは、神の心とはずれていることがこれらの箇所で言われている。いのちの創造主の意志は人間の善意をはるかに越えており、よって創造主の意志に聞き従うことによって、人は新たなる地平へと超え出て行くことができることがされている。

2.4　聖書的根拠

おさな子についての神の思いが、人間の思いをはるかに超えていることを示す聖書カ所。

イザヤ 49 の 15~16
女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。
たとえ、女たちが忘れようとも
わたしがあなたを忘れることは決してない。
見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける。

福音書において、イエスはアブラハムの子ダビデの子と称されている。このダビデはサムエルによる次代の王の選定においては、その幼少さから父親エッサイによって候補から排除されていた。サムエルはエリアブに王にと考えたが主は次のように語った。

「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」

こうしてその時、羊の番をしていた末の子ダビデが王に選ばれることになった。主の思いは人間の思いを超越していた。そのダビデ王の治世について、聖書は次のように語っている。

イザヤ 11 の 1－10
彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず
耳にするところによって弁護することはない。
弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
狼は子羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。
小牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。

乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。
私の聖なる山においては
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。

イエスはこのイザヤの言葉の成就する形で、動物小屋の中で誕生する。これが幼きイエズスの、この世での出発点である。この動物小屋は常識的に考えれば人間の出産の場としてはまことにふさわしくないが、おとめ・マリアが母となることを受諾し、ヨセフが当時の社会的常識を越えて人知れず養父となることで、このおさな子イエスはこの世に生を受けることができた。これはアブラハム以来の神と人との関わりの歴史において、常に人間の常識を越えて、ご自分の創造したいのちに仕える超越者である神の究極の自己啓示、特に神の人間に対する普遍的倫理的態度として立ち現れてくる。（ルカ 2 の 6~7、11~12、16）

その神の人間に対する普遍的倫理的態度はアブラムとその妻サラに追い出された女奴隷ハガルが野原をさまよっている時「女主人のもとに帰り従順に仕えなさい」（創世記 16 の 9）との神の言葉を聞き人のいのちに仕えるまことのはしため（女奴隷）に変えられて行ったこととして実を結ぶ。さらに同じ神の言葉はイエスの母、おとめマリアが困惑している受胎告知の場面で、「神にできないことは何一つない」（ルカ 1 の 37）と語ることによって「私は主のはしため（女奴隷）です」との自己理解を引き出すのである。こうして「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、一番上になりたい者は、すべての人のしもべ（奴隷）になりなさい」（マルコ 10 の 43～44）と言うキリスト教的人間論の中心テーマがこの二人の女性のおさな子との関わりにおいて実現する。そうなるとこのおさな子たちこそが人間が神の求める本来的人間への変容を実現するまことのしもべ（奴隷）・はしため（女奴隷）であると言える。ここにおさな子とそれに仕える者としてのしもべ・はしためとのシンクロニシティが実現する。新自由主義的感性に染め抜かれ格差に鈍感になっている現代、上述のシンクロニシティにおいて教育・福祉は実現し、さらに人間社会は構築されていることを確認しておく必要があるではないかと思われる。日本において活動して来たさまざまな修道会もこうした神の言葉の深みに動かされて奉仕を続けてきたことを忘れてはならないであろう。

3　ショファイユの幼きイエズス修道会来日最初期の活動における神の普遍的倫理的態度の顕現

最後に和歌山信愛大学の設立母体であるショファイユの幼きイエズス修道会が 1877 年 7 月 9 日に来日した当初、日本においてどのような活動からスタートしたかを『いのちの水の流れるままに』を参照しつつ見てみよう。（ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部　2007 pp.11-13）

1877 年 5 月 18 日フランス・ショファイユの修道院を出発した 4 名の会員は、1877 年 7 月 9 日に神戸に上陸した。長い船旅の疲れをとる間もなく 13 日には 2 歳 8 ヶ月の女児が、その翌日には 2 歳半の男児がシスターたちのもとに連れてこられた。出産した女性や親を知ろうともせず、名

前も知らされない子どもたちを彼女たちは即座に引き受けるのである。この子どもたちが安心してすやすや眠る彼女らの家は、あたかもベトレヘムの馬小屋のようであったと表現している。また知り合いもなく言葉も生活習慣も文化、特に宗教文化の全く違う日本の地で生きようとする4名のフランスからのシスターたち自身が、あたかも寄る辺なきベトレヘムで宿を探し求めて、与えられないヨゼフとマリアのようであった。いわばシスターたち自身が異空間に放り出された孤児のようであったと表現している。そうしたシスター方のもとに連れてこられたのが、これらの寄る辺なき乳飲み子たちであった。「幼子イエズスはベトナムの馬小屋で、聖母マリアと聖ヨセフに全面的にいのちを委ねる無力な存在としてお生まれになった。そのみ名をいただく本会の4人のシスターが、幼きイエズスのご生涯にあやかりながら、彼女たちに頼るほか、生きる術のない孤児や捨て子を世話することから活動を始めたのは意義深い。」と述べている。シスターたちを日本に派遣することを決断した総長レーヌ・アンティエ、および修道会の最大の方針は、すべての人の救いであった。それは紛れもなく天地創造以来、歴史を通して示されてきたすべてのいのちの創造主である神の望みでもあった。来日して間もない4名のシスターたちは、自分たちに託された幼子を神からの贈り物として受け入れ、だれ一人排除することなく育むことによってこの神の望みを日本という地に受肉させた。これは旧新両約聖書の発端であるアブラハムとマリアにまつわる幼子への神の普遍的倫理的態度の顕現でもある。

また1889年11月1日開設された熊本支部においても、日本文化に対する新たなチャレンジが始まっていた。本妙寺付近には当時ハンセン病患者がたくさん身を寄せていた。その多くは橋の下や樹木の下に身を寄せていた。これら病人の世話をしていたシスター・セン・ジャン・ド・ラ・クロワは、その中の一人を世話しようと修道院に連れてきた。しかし警察官は病人に修道院を出て行くよう命じた。シスターはこの処置に猛烈に反対し動じなかった。警察官は内心シスターの愛徳に感嘆の念を禁じ得なかったと伝えられている。その後、収容施設が開設されシスター・セン・スタニスラスもこの奉仕に従事した。1898年5月8日付のシスター・セン・スタニスラスの総長宛の手紙には、手足が腐り、蛆やしらみの餌になって死を待っていた患者たちを、中尾丸の病舎に連れてきて身体を洗い、清潔な衣服を着せ、布団に寝かせて医者の診察を受けさせるシスター達の奉仕がどれほど病人達を喜ばせたかが報告されている。日本人からも、見捨てられた最も援助を必要とする人々に手を差し伸べた後、このハンセン病患者診療事業は宣教地で大病院などを設立・運営することを使命とするマリアの宣教者フランシスコ会のシスター方によって継続されることとなった。1898年10月20日のことであった。ここでもアブラハムにおけるハガルやイシュマエル、イエスにおけるマリアやヨセフにおいて人間社会における人の思いをはるかに超える神の普遍的倫理的態度が顕現してくるのである（ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部 2007 pp.27）。

この課題は今、教育について考える時注目すべきことを示唆しているように思われる。上に述べた来日最初期の信愛設立母体であるショファイユの幼きイエズス修道会のシスター方の生き方に見られる、自らのうちから迫ってくる自分を越えた神の普遍的倫理的態度を生きることは現代においてますます必要ことであろう。すなわちあらゆる違いや立場、門地、貧富の差、出生、国籍、人間社会の常識的な判断、社会的立場がもたらす格差を越えて人の命や人生に関わろうとする原初的な内的動きの意識化と、自分たちの奉仕を必要としている人びととのシンクロニシティを自らの生きる原動力にして行くことは、人格の完成を目指す（文部科学省 2018 pp.15）現代の教育の最大のテーマであろう。

引用・参考文献

秋山憲兄(2003)　『新共同訳　聖書辞典』　新教出版社

ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部(2007)　『いのちの水の流れるままに』　ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領（平成29年度告示）』 株式会社東洋館出版社